

『猫が溜息つく時は…』

一天高く猫眠る星シリーズ 2-

第一章 「永世議会」

「だから言ったんですよ。あんなキャティなんて惑星と交流を持つ必要はなかったんです。今からでも遅くはありません。我々は手を引くべきです。」

「そんなことはない。我々は友情と誠意を持ってキャティの住民を助けるべきなのだ。」
各政治局の代表を集めて開かれる永世議会は、今や興奮の坩堝と化していた。もはや議長 1 人だけの力ではこの騒乱を収め切れなくなっていた。

新たにその存在を確認された MR-7 星系第 3 惑星の住人達は、ここ永世議会でも大もめにもめていた。つまり、キャティの住人を地球の同胞として認めるか、それとも初めて出会う種族として外交すべきかだった。最初の段階では、ほとんどの代表が同胞としては認めたくはないが外交してもよいという意見に傾いていた。しかし、約 10 時間前、キャティからの最新のニュースが入ってきた時を境に、これが大きく様相を変えてしまったのである。

つまり、10 時間前、永世議会に投げかけられた一つの事実が、長く続いた平和に小さな波紋を投げ入れてしまったという訳だ。

その小さな波紋を説明するには、まず地球時間で 3 日ばかり遡る必要がある。3 日前キャティの科学者の 1 人が、ある 1 つの驚くべき事実を発表した。それはキャティだけの災難だけでなく、MR-7 星系全体の存亡に関わるものだった。すなわち主星である MR-7 星の最期がすぐそこまで迫っているということだったのだ。

このニュースは地球にもすぐ伝わり、何人もの科学者が集められ、膨大なデータと意見が共にコンピュータ POWLA にかけてされた。そして、ようやく 10 時間前その答えをはじき出した POWLA は、主星 MR-7 星の爆発を予言した。しかもその時期は意外にもかなり近い未来だった。

POWLA の出した結果は、すぐさまその時キャティの問題を議論していた永世議会に持ち込まれた。そして、その瞬間から永世議会は嵐の大海原の中に投げ出された形となってしまったのだ。

「諸君！君達の意見はよく分かった。しかし、このままでは議会としての正しい結論が生まれるとは思えない。そこで、我々はここに 24 時間の休会を宣言するものとする。議決は 24 時間後に採りたいと思う。そこで諸君の正しい判断を聞かせて欲しい。」

そして、ついにこの議会の最高顧問である連邦委員長が立ち上がった。今まで黙っていたのだが、この惨状を見るに見かねたのである。本来ならばオブザーバーとしての立場しか持たない連邦委員長が、正式な場で発言するなどという前代未聞の事態まで引き起こしてしまったのである。しかし、今はこんな事も問題にならないほど、人々は興奮しきっていたのだ。

連邦委員長は一つ大きく伸びをすると、驚く人々をぐるりと眺め、会議場から退場した。そして、会議場のすぐ裏側にある委員長のプライベートルームに戻ると、自分の椅子にどっしりと座る。自分の椅子に座ってゆっくりと落ちついてから、やっと自分が間違った発言をしてしまったことを自覚した。いや、あの騒ぎの中にいたら、誰だって正しい判断ができなくなるに違いない。

「ピッ、かなりお疲れのようですね。紅茶を入れましたので、冷めない内にお召し上がりください。」

「ありがとう、ウィンダム…。」

ウィンダムからティーカップを受け取ると、大きく溜息をつく。

「ピッ、指田少佐及び湯浅中尉、確認しました。委員長、2人を通します。」

「ああ、頼む…。」

手にした紅茶を一気に飲み干して、襟を正す。それとほぼ同時に指田少佐と湯浅中尉が入って来た。

「こんにちはあ！どうもお久しぶりです。」

元気に飛び込んで来たのが湯浅明子中尉。極東圏文化部では動くスピーカーとまで呼ばれるほどよく喋る。その後ろからのそっと入ってきたのが、指田則和少佐。やはり極東圏の科学部に籍を置く。しかし、その非凡なる能力ゆえか、政治圏・所属部を越えて仕事をする事が多く、お陰で極東圏にいることはそう多くない。

「ああ、座ってくれ。何か飲むかい？何でもウィンダムに頼んでくれ。」

「はい。」

そう言われてウィンダムと一緒に喜々としてキッチンへ向かった湯浅中尉を見ながら、残された2人はお互いに肩をすくめ合う。

「ところで何なんですか。わざわざ私達を呼びつけたのは？」

委員長はちょっと手を伸ばし、机の上に付いているスイッチをいくつか押す。指田少佐は何の事か分からず、仕方なしに委員長の行動を黙って見る事になった。

スイッチを押すと同時に委員長の後ろにスクリーンが降りてくる。やがて、そのスクリーンが大体の位置で止まると、映像が映しだされた。それはMR-7星系の星系図だった。

「いま開かれている永世議会で、ある1つの議題について話し合っているのだが、実際のところ非常に混乱している。それというのも、我々が今までまだ1度も出会ったことのない事態に直面したからだ。」

「キャティを地球圏の中に入れる問題ですか？」

「それもある。だが、混乱している原因はそれだけではないのだ。君はキャティの衛星がいくつあるか知っているか？」

「えーっと確か、リユーイ、メラニ、ソルトリバー、キャットテイルの4つだったと思いますが。」

「その通りだ。その中のソルトリバーに、ある科学者がいるのだが、その科学者がMR-7星の爆発を予言した。そこでキャティの住民達は地球への移民を要請してきたんだ。」

「その予言は確かなんですか？」

「POWLAも同じ結論を出した以上99%その通りだろう。だが混乱している理由はその後なんだ。永世議会での結論は移民は認めない政治圏と認める政治圏とで2つに割れてしまっている。下手をすれば、この連邦政治局の存続すら危ない状態なんだよ。」

「まさか…。」

そこへウィンダムと一緒にココアを持っている湯浅中尉が、いつものようににぎやかに戻って来た。

「くま先輩もココアでいいですね。」

…と有無をも言わさぬ様子でカップを指田少佐の前に置いていく。

「で、私達にどうしろと言われるんですか？」

「その科学者に会って来て欲しい。会って何かこの非常事態を避ける手段を探して来て欲しいんだ。」

これは連邦委員長としてより、一地球人としてのお願いだ。」

委員長は2人に頭を下げた。そうしていると年齢が年齢だけに絶対に連邦委員長なんて肩書を持っているようには思えなかった。指田少佐は黙って立ち上がると、その委員長に軽く会釈だけして部屋を出ていく。残された湯浅中尉はどうしていいか分からず、委員長の姿と指田少佐の出て行ったドアとを交互に見ていた。

第一章 「永世議会」

H6. 25. APR

第二章 「なんでキャットテイルなの」

連邦委員長からソルトリバー行きを頼まれた日から2日も過ぎて、あたしはようやく冥王星ステーションに来ていた。それは、まず今回のソルトリバー行きが正式な指令でないことと、問題の中心となっているMR-7星系への航行が認められなくなったことだった。そのために、あたしはわざわざ休暇を取らなきゃならなかったし、目的地も単にMR-4星系へ観光で行くということになっている。

それにしてもくま先輩には本当にがっかりしたわ。あの日、議会本部の建物から姿を消して以来、とうとう信州には1回も戻らず、どこへ行ったのか消息をも知れなくなってしまった。お陰であたし1人でキャティに行くことになってしまったじゃないの。

Myaは仕事が入って一緒に来れないって言うし、シバちゃんはキャティから帰ってきて以来、ESP研究所に行っただけでほとんど会えないし、本当につまんない。行き先がキャティじゃなかったら、行く気なんてほとんどないと言ってもいい、まったく…。

「2番ポットのアルトロンですけど、発進できますか？」

あたしはゲートでIDカードを見せながら検査官に訊いてみる。

「どうぞ。準備はすべて整っていますから。」

検査官は気軽に答えると、2番ポットの方を指差す。

「MR-4星系かあ。いいですねえ。この季節なら空いてるし、今頃なら第3惑星の紅葉が綺麗だと聞いてますよ。ああ、俺も行きたいなあ。」

「そんなに、いいものでもないですけどね。どうもありがとう。」

あたしはまだ喋り続けている検査官に形だけのお辞儀をして、2番ポットへ向かう。初めてキャティに行った時からはもう何回もステーションに来ているけど、何回来てもステーションという所は来る度にドキドキする。今回は初めて1人で行くので特に緊張しているのが自分でも分かる。

2番ポットに船体を赤く塗られたアルトロンが停泊していた。ステーションのドックで点検して貰って、いつでも発進できるようになってるはず。最近はずっかりMR-7星系専用機となっちゃって、色もメタルシルバーからわざわざ赤く塗り変えて貰った。

「今回もよろしくね。」

乗り込む時、いつものようにアルトロンに挨拶して、コックピットルームに向かう。いつもなら、みんなでワイワイやりながらだから何も感じなかったけど、こうやって1人の時にやるとなんか妙に照れくさい。

1人で赤くなりながら誰もいないはずのコックピットルームに入った途端、よく聞き覚えのある声を聞いてビクッと立ち止まる羽目になった。

「遅い。出発予定時刻よりもう15分過ぎてますよ。」

「くま先輩！」

び、びっくりした…。まさか、行方不明のくま先輩が、このアルトロンにいるなんて思いもしなかったもの。

「まったく、私がいないと、すぐいい加減になるのですね。さあ、早くコンソールについて下さい。すぐ出発します。」

「は…はい！」

なんだか訳も分からず、とにかく自分のコンソールにつくと、管制室からの発進OKの緑のシグナルが点灯するのを確認した。まったく、この人は一体何なんだ。3日も消えてたと思ったら、急に現われるし。昔からおかしな人だとは思ってたけど、こんな掴みどころのない人だとは思わなかった…。あ、クマか…。

どっちにしたって、「ばかやろー」…と言いたいくらい。本当にびっくりしたんですからね。そんなあたしの気持ちとはまったく関係なく、いつもの様に軽い浮遊感の後、加速感が追ってくる。もう今やすっかり慣れてしまったアルトロンの発進。DCMにいくつかのデータが出ているけど、別に問題となる数字は見あたらない。だいたいこのアルトロンのMR-7星系に行く限り、まず心配はないはずなんだ。すでに専用船となっちやているアルトロンにはMR-7星までの航路があらかじめインプットしてあるので、はっきり言って何もすることがない。

「ところで訊いてもいいですか？」

「どうぞ。」

アルトロンが完全に自動操縦に切り替えられたのを確認して、あたしはここ数日の疑問をくま先輩に訊いてみることにした。

「この3日間、正確に言えば議会本部の委員長のプライベートルームを出てから、このアルトロンにあたしが来るまでの間、いったいどこで何をしていたんですか？」

「おやおや、そんな怖い顔をしないで下さい。まあ、いいでしょう。どうせ湯浅中尉には全部話しをするつもりでしたから。たぶんこの先必要となる情報もありますし。」

くま先輩はいつもとまったく変わらない笑顔で、これまたいつもと変わらないのんびりとした口調で話し始めた。

「簡単に言えば、MR-7星系の爆発を予言した例の科学者について調査していたんですよ。」

「どんな人なんですか？」

「はっきり言って、マッドサイエンティストと呼んで構わないと思いますね。実はソルトリバーへは1度行ってきたんですが、とうとう彼には会えませんでした。」

「えー、くま先輩ほどの人でも会えないんですかあ。」

半分は驚きと半分はおちょくりでそう言うしてみる。

「だって衛星全体が巨大迷路になっているんですよ。冗談じゃありませんよ。」

話している内に思い出したのか、真面目に顔が怒っている。こういうくま先輩を見るのは実に珍しいことなんで、悪いとは思うけど笑ってしまう…。

「笑うことはないでしょう、笑うことは…。」

「だ、だってえ…。」

だ…駄目え。笑うまいと思えば思うほど、余計おかしくなってくる。

「勝手にして下さい。もうすぐMR-7星系ですからね。それまでにはまともにしてて下さいよ。ちなみにキャットテイルの方に降りますから。」

え…？

「ソルトリバーに直接行くのは不可能だと分かりましたからね。キャットテイルなら基地もありますし、一旦降りて対策を考えるんです。いいですね。」

「駄目って言っても。キャットテイルに降りるんでしょ？」

「よく分かってるじゃないですか。」

くやしい…。今日は日頃トラブルメーカーの Mya がいないから、くま先輩の注意が全部こっちに来るんだもん。あたし、くま先輩に敵わないのはよく分かっているけど、それを認めるのは大嫌いなんですから。

アルトロンはあたしの意志とは全然関係なくキャットテイルへとゆっくり降りていく。正面にはもう何度となく行っているキャティ、右手に小さく見えるのがソルトリバー。

でも、あたしはこの時点で、このソルトリバーでマッドサイエンティストに会うことの重大さと、それがどんなに困難なことか理解していなかった。くやしいけどそれが分かったのはキャットテイルに降りてからのことだった。

第二章 「なんでキャットテイルなの」

H6. 25. APR

第三章 「ソルトリバーの変わり者」

「ユアサさん、いるですか？」

「はい、あら…。」

1度でも聞いたらたぶん忘れられない妙なアクセントでもって喋るキャティ人のミヨーが、珍しく神妙な顔つきであたしの前に立っている。

「どうしたの？」

「今、これがユアサさんに届いたです。見て下さい。」

ミヨーが持ってきたのは、1枚のディスク新聞。ここキャットテイルにある第7陣営、通称キャットテイル-セブンに来てから、こうして毎日届けて貰っている物。でもこんな早い時間に持って来たのは初めてだと思う。いつもは人が寝る間際になってやっとその日のを持ってくるのに…。

「どうしたの？今日は随分早いじゃない。」

「違います。これは新聞じゃないです、はい。ソルトリバーからユアサさん宛でさっき届いた物です。」

「ソルトリバーから？」

一体誰だろ？まさかくま先輩ってことはないでしょうから、残るのは例のマッドサイエンティストってことになるけど…。それこそ、まさかよね…。

ここキャットテイル-セブンに来てからというもの、あたしはこれといって思っていた以上の成果は上げられないでいた。だいたい、あたしはソルトリバーに行けばすぐに会えると思っていたし、会えばそれですぐに済むと思っていたから、まさかこんなにキャットテイルに滞在することになるなんて思ってもいなかった。

くま先輩が強引に降りたキャットテイルはやっぱ正解だったのだ。あれから、何回となくソルトリバーには行ってるけど、行く度にソルトリバーは姿を変えて、まるであたしをからかっているようにしか思えない。一番ひどかったのは一面小麦粉の平原で、あたしは行けども行けどもただ真っ白になるだけだった。

くま先輩はその度にちょっと笑って、「まあ、頑張ってください。」と言うのがもうここ数日の習慣となってしまう。で、そのくま先輩はと言えば、毎日どこへ出かけているのか、ここにいたためしがない。まあ、少なくともソルトリバーに行っていないことだけは確かなんだけど。

「ミヨーも一緒に見る？」

「見てもいいですか？」

「いいわよ。その代わりにおとなしくしててよね。」

あたしはミヨーの持ってきたディスクを再生機にかけた。ヴワーンというホワイトノイズで始まり、やがてテストパターンがゆっくり浮かんでくる。まるで大昔のブラウン管TVみたい。そういやあ、このテストパターンも昔のTVの放送局が早朝にやっていた奴と同じ物じゃなかったっけ。続いてタイトルレーベルが出る。

「何よお、これ。まるで安物のビデオディスクじゃない。」

「はあ、そうですか。」

その後に出てきたタイトルを見て、差し出し人がすぐ分かった。だって、こんなバカな物を作るのは、あいつしかいない。

「ソルトリバー攻略法。監修シオカワ・カツシ…。いい加減にして欲しいものね。」

「はあ、そうですね。」

画面では最初くま先輩が迷い込んだという巨大迷宮の攻略法が説明されていた。どうせこのまま見ても、ただ今まで出て来た仕かけの種明かしで終わるんでしょ。つき合っていられないわ。

「やあめた、つき合ってるわ。」

「はあ、そうですね。でも面白いよ、これ。」

まったくミヨーはミヨーで、これまた変な人。何を訊いても「はあ…」しか言わない。およそ感情があるとは思えない。Mya といい、くま先輩といい、あたしの周りには、どうしてこういう変な人ばかり集まるのかしら…？

「ユアサさん、これ、シオさんだよ。」

いい加減飽きてきて本を読み始めた途端、ミヨーが大きな声を出すものだから、つい振り返ると画面に変な男が1人映っていて、なんかお座敷芸を披露してくれている。

「何よ、この男…。」

「しー！」

ミヨーが口に手を当てて静かになってジェスチャーをする。

「さてさてさて、という訳で毎日このソルトリバーまでやって来てくださるユアサのアキコさん。あなたですよ。あなたをなんと、なあんこの研究所へご招待しようという訳なんです。つきましては明日の正午にお迎えを送りますゆえ、どうかどううか、いらっしゃって下さいませ。それでは明日、明日のその日を首をながくして待っております。ではではでは。」

それでディスクの映像は終わっていた。

「ユアサさん、良かったです。これでソルトリバーへ行けるですよ。」

「まあ、いいけどね。」

あたしはもう半分以上どうとでもなれという気になっていた。ソルトリバーのマッドサイエンティストがどういう訳かあたしを気に入ってくれたらしい…ということだけ漠然と理解していた。ただ、ひょっとしたらこれはあたしにとってチャンスかもしれないし、今はとにかく 2000 人余りのキャティの住人を無事に救うことが先なんだから、これを見逃す手はないのだろう。

「ミヨー、どこへでもいいから、明日行きますっていう様な内容の電波を飛ばして。」

「どこへでもって、どこですか？」

「本当にどこでもいいのよ。どうせここの電波は全部聞かれてるんだから。」

おろおろしているミヨーを横目で見ながら、わざとつき放しちゃう。こうしてみると、なんてキャティの人達はのんびりしているんだろと思う。なんとなくイライラしてきちゃう。あーあ、こういう時シバちゃんなら、すぐに分かってくれるのに…。

ふてくされて娯楽ルームへ行くと、みんながTVを見ていた。ちなみにここのTVはニュースしかやっていない。それでも娯楽なんだそうだが、地球と違って明るい話題の方が多から、それなりに楽しめるんだなと思っている。でも今日はいつもと違ってみんなすごい真剣な顔つきで喰い入るようにTVを見ている。

「どうしたの？」

「とうとう地球側の回答が出たのさ。なんと地球は我々キャティを同胞とみなさないらしい。地球はキャティから全面撤退するそうさ。」

「えーっ！うそ…。」

そんなあ。あたしは何のためにこんな苦勞してると思ってんのよ。いったい、連邦政治局の人達は何を考えているのかしら。

「ユアサ、君を責める気はない。どこでも組織というのはそういうものだ。君がここにいるのはもちろん大歓迎だが、やっぱり地球へ戻った方がいいだろうと思う。」

「バルチェ…。」

バルチェはこのキャットテイル-セブンの最高責任者。あたし達が初めてキャティに来た時、救助に来てくれたナイトウォーカーに乗っていたのもこの人。この人とはその時からの付き合いだから、キャティの人の中では一番付き合いが長いといえる。

最高責任者の肩書きからか、けっこう冷たい態度を取ることが多い。しかし、実はただ人とつき合うのが不器用なだけということが分かってから、なんか急に親しみを持ってしまった人なのだ。

「地球に訊いてみるわ。」

「無駄だよ。すべての通信手段は使えないんだ。うちのシステムでは地球まで届くほどのパワーは持っていないんでね。」

「だって、今まで…。」

「今まではここと地球の間に中継ステーションがあったんだ。それも現在ではなくなってしまった。」

重苦しい空気が娯楽室に流れる。みんなの視線が痛い。いっそ、あたしを罵ってくれた方がどんなにましだったか。

「今日サシダが戻ってきたら地球へ帰りたまえ。もうキャティは終わりだ。」

そう、くま先輩は…？こんな大事な時にいったいどこへ行ってるの？

あたしはいたたまれなくなって、その場から逃げ出していた。でもどこへ？いったいどこへ逃げればいいというのだろうか？

「ユアサさん、電波飛ばしたです。」

ミヨーが何も知らないような顔で、のんびりそう言いに来た。でも、あたしはそれに答えもせずに走った。どこへ行けばいいのか自分でも分からないけど、とにかく走った。

そして気がつくと、キャットテイル-セブンの1番端っこにいた。そこは外の景色がよく見える様にガラス張りの部屋になっていた。こんな部屋があることは知ってはいたが、実際にここへ来たのは初めてだった。

「ここからはキャティがよく見えるんですよ。」

そして何故かくま先輩がそこにいた。

「湯浅中尉が何故ここに来たか、大体の想像はつきます。でも言うておきますが、私達が地球へ戻るのにはキャティの住人を助ける方法を見つけてからですから。」

そう言って、いつもの笑顔を見せてくれるくま先輩が、すごく頼もしくもあり、嬉しくもあった。そして、改めてソルトリバーへ行くことの重大な責任を感じた。

大丈夫…。あたしなら絶対できる。そう決めた。そう決めたら少しは気が楽になった。

「さ、忙しくなりますよ。」

くま先輩の声が小さな部屋に響く…。

第三章 「ソルトリバーの変わり者」

H6. 25. APR

第四章 「マッドサイエンティスト門前の猫に教わる」

「ねえ、本当に信用していいんですかねえ。あたし、なんか心配で…。」

「大丈夫ですよ。シオさんは悪い人と違うです。」

「誰があんたに言ったのよ。あたしはくま先輩に言ったんだから。それにだいたい何であんたがついてくんのよ。」

どういう仕組みになっているのか、約束通りソルトリバーから来た小型艇に3人が乗り込むと、パイロットもいないのに自動的にソルトリバーに向かっている。とりあえずマッドサイエンティストと呼ばれる人の物だから、さすがと思うしかないのだろうけど…。

何故か乗り込む段階になって、いきなりミヨーが飛び乗ってきたんで、3人になってしまったけど、重量制限にはひっかかんなかったようでホッとした。現在キャットテイルとソルトリバーは比較的近い位置にあるので、万が一という事があっても、大した事にはならないと思う。だからこそミヨーを乗せてしまっても、仕方ないで済ましたんだけど、実際に危険なのはソルトリバーに着いてからなんだわ。

くま先輩はいったい何を考えているのか、まるで分かんなくなっちゃった。くま先輩を見てると本当にこの小型艇がソルトリバーに向かっているのかそれすら不安になってきてしまう。それくらい、態度がいつもとまるで変わらない。

「ユアサさん、あれ、ソルトリバーです。」

ミヨーだけがやけにはしゃいで…。Mya がいればあたしもこういう風にはしゃぐんだけど、1人だと莫迦らしくてやってらんない。

「指田少佐、本当にキャティの人々を救うことなんてできるんでしょうか？」

「できる…より、やらなきゃいけないと思いなさい。連邦政治局が見捨てた以上、私達に失敗は許されないんですから。」

昨日、くま先輩があたしの知らなかった真相を話してくれて、初めてあたしが何故選ばれてこの任務を貰ったのかその理由も分かった。つまり、今まで漠然としか知らなかった委員長の本当の姿を知ってしまった。

あの委員長、実は連邦政治局の中ではかなり孤立していて、味方も少なかったものだから、自分の味方を作りたかったんだと思う。まあ他のお偉方はみんな自分のことばかり考えているし、本当に人類のことを考えているのはあの委員長くらいのもものだから、仕方ないとは思ったけど。

今回の事件に関しても、キャティと仮の外交ルートを開いたのもあの委員長が手を回したからだったし、こうやって MR-7 星の爆発を聞いて、すぐ行動を起こしたのも委員長だけだった。おかげで手遅れにならなくて済みそうだけど。それはあたし達がソルトリバーの科学者の協力を得られるかどうか、それにかかっている。

小型艇はゆっくり制動をかけながら、ソルトリバーに降りていく。今日見るソルトリバーは今まで見たどのソルトリバーよりも美しかった。まるで自然の美術館という感じだったけど、残念なことに近づいていくに従ってそれがホログラフィーであることがすぐ分かってしまった。ただ、彼があたし達を歓迎してくれていることは確かだと思う。

「どうしましょう？」

で、降りたはいいけど、それからどうしていいかが分からない。せめて目的となる建物でも見当た

ればいいんだけど、周りには見事に何も見えない。ま、もっとも、これが迷路だと考えるよりは少しはましな状況かもしれない。

「こっちです。入口があるです。」

ところが何の役にも立たないと思われていたミヨーが、自信たっぷりに1つの方角を指差している。いったい、どうなっちゃったのかしら。

「ミヨー、君はソルトリバーに来たことがあるのか？」

「はいです。ソルトリバーにシオさんが住み始めた頃に遊びに来たことがあります。最近は全然遊んでくれなくて悲しいです。」

あたし達はミヨーが指差した空間を眺めた。いっけん何もない空間なんだけど、触れると微かな弾力があって、確かに何かがあることが分かる。

「どうしましょうか？」

「どこかその辺にスイッチがあるかもしれないし、みんなで捜してみましよう。」

…と、くま先輩の提案に従って、3人して一斉にそこらへん一帯を見えない何かを捜して叩き始める。と言っても、そこに本当に何かあるかどうかは叩いてみなきゃ分からないという恐ろしいシチュエーションで、それでも10分くらいの努力の末、やっと入口を見つけ出すことに成功した。

「おめでとう！この先を曲がるとゴールだよお。」

な、なんなんだ。入った途端、でっかい看板がどーんとある。しかもネオンサインまで点滅している。なんだか気が抜けていくのを感じる。

「とりあえず、気にせず行きましよう。」

あたし達はくま先輩に促されて、先へ進むことにした。まず丁寧なことには行く先行く先にうるさいほど表示があるので、そうまったくもって派手な奴が…迷子にはなりそうにはなかった。

「ようこそ、ソルトリバーへ」

こうかかれた1枚のドアの前であたし達は佇んでいた。果してこのドアを開けていいものだろうか。3人してお互いに顔を見合わせてしまった。何かこのドアを開けてしまったら後戻りできなくなるような気がする。

「開けなきゃ、ならないんでしょうね。」

「たぶん…。」

恐る恐るという具合に2人でドアを押し開くと、そこには…。

「これはこれは、ようやくおいでになりましたね。いやあ、お待ちしていました。ささっ、こっちの方へ、ずずずいと…。」

か…軽い…。まるでコメディアンみたいな男がニヤニヤして立っていて、揉み手までしている。

「あなたがソルトリバー博士ですね。」

「いやでございますよ、博士なんて…。いやいやそれ程の者ではないのだから。気軽にシオさんとも呼んでやって下さいまし。」

あたし、少なくとも科学者というものは、もう少し威厳のあるものだと思っていたんだけど、どうも認識を根本から変えなきゃいけないような気がするわ。

「シオさん、久しぶりです。ミヨーを覚えてるですか？」

「ミヨー！覚えてますとも、君こそは幼き日に私と一緒に遊んだ幼なじみではないですか。いやあ、これは嬉しい。嬉しいとも…。よくぞ、来て下さいました。」

うう、早く帰りたくなってきた。こうまで性格が軽いと、何故かあたしの方が惨めな気分になってくる。

「ところで、博士、我々が来たのは…。」

「みなまで言わっしゃるな。このシオさん、すべてお見透しですぞ。あなた方は MR-7 星の最期をどうしたら防げるか、それを訊きに来たのでございましょう？」

「そう、その通りです。」

この意外とまともに進みそうな話しの展開に、一瞬、あたしとくま先輩は顔を見合わせて喜んだ。だがそれもすぐに吹き飛んでしまう。

「ありませんね。」

ここまで話を盛り上げておいて、ありませんよの一言で崩すなんて、それはいくらなんでもあんまりじゃないかあ。

「よろしい、お見せしましょう。こちらへどうぞ来て下さい。」

いきなりソルトリバー博士は比較的まともな喋り方になって、あたし達を研究所の中へ案内してくれる。でも、よおく観察していると、時々訳の分からない歌を口ずさみながら、身振り手振りを入れて踊っている。

「指田少佐、本当にこの人でないと駄目なんですか？」

「仕方ないでしょう。委員長の話しによれば、この人でないとキャティを救うことはできないらしいですからね。」

「と一っても、信じられないんですけど。」

あたしとくま先輩とでヒソヒソ話しをしていると、心なしか耳が大きくなったような気がする博士が足を止めてしまった。あたし達も思わずつられて立ち止まる。

「聞こえましたぞ。私を信じていませんね。」

「え…あの、今の話を聞いてたんですか…？」

うう…、思わずたじろいで1歩下がってしまった。どこから出て来るのか妙な迫力があって、思わず逃げ出したいくらい。

「左様、どんなに小さい音でも、このシオさんが発明したミミダンボを付ければ、必ず聞こえますぞ。」

耳かと思っていたのに、いきなり取り外してしまい、あたし達は一瞬ギョツとなる。

「シオさん、凄い！凄い！」

ミヨーがやけに喜んで、おまけに拍手までするもんだから、博士は調子に乗ってテーブルの上まで乗ってしまった。

「わ、分かりました、信じます。信じますから、降りて下さい。」

慌てて博士を落ち着かせようとしているくま先輩の姿が妙におかしくって、悪いとは思いつつもつい吹き出してしまう。

「湯浅中尉、笑っている場合じゃないと思いますが。」

「は一い。すいません…。」

ちえ、結局最後に怒られるのは、あたしなんだ。あたしはなんとか、くま先輩の気をそらそうと、手近なテーブルの上にあった円筒形の箱を手を取った。箱の表には「お喋りウエッティ」と書いてある。

試しにふたを開けてみると…。

「いやあ、こんにちは。今日はいい天気ですねえ。僕はこういういい天気の日には散歩に出かけることにしているんだけど、良かったら君もどうだい？きっと気分が良くなると思うんだけどなあ…。」

確かに…お喋りだ…。

「ユアサさん、食べますか？」

お喋りウエッティのふたを閉めテーブルに置いた途端、ミヨーが何かお菓子の袋を差し出してきた。

「これ、なあに？」

「おいしいですよ。」

そう言われて中を覗き込んでからあたしは思いっきり後悔した。

「いらない…。」

誰がゴキブリなんか食べたいと思うんだ。ばかやろー！

「これは見栄えが悪いんで誰も食べてくれないのですが、本当はとってもおいしいスナック菓子なんですよ。はい。」

博士はそう言ってそのゴキブリを一匹袋から摘み上げる。

「Eat Cockroach！」

ミヨーがすかさずそう叫ぶと、博士はそのゴキブリを口にくわえて…。

「Good Taste！」

と、叫び返す。まるでお菓子のコマーシャルを見ているみたい。形がゴキブリでさえなきゃ食べてみるんだけど…。

とにかくこのゴキブリから話題をそらそうと適当にそのへんの箱を指差してみる。

「あの、博士、これは何ですか？」

「おお、それですか。それはジャーマンパイですよ。こう4人で卓を囲むと…、うーむ、なんとちようど4人いるじゃないか！」

「あのう…麻雀パイじゃないんですか？昔の中国のゲームでしょ。」

「違あう！マージャンパイでなくジャーマンパイ。昔のドイツのゲームである。イツヒ、テンツパッテンー発ローン！」

なんかよくは分からないが、博士1人で両手にパイを持つ仕草をして盛り上がっている。これじゃ素直にくま先輩に怒られていた方がましだったかも知れない。

「シオさん、チョンボだよそれ…。」

「ガーン！」

というようなやり取りをミヨーと繰り返して、これではなかなか話が先に進まない。

「博士、MR-7星はどうなっているんですか？」

キーン…。

耳元でくま先輩、怒鳴るんだもん。一瞬何も聞こえなくなる。

博士は謝るようなジェスチャーをしてみせると、再び気を取り直して歩き始めた。みんな音が聞こえないもんだから、自然と慎重に歩くことになる。これは何かやるぞと思っていたら、とうとう博士がドロボウ歩きを始めだした。つられてミヨーとくま先輩までが同じ様に歩き始める始末。

ガタン！

「痛い。」

前に気を取られていて椅子を思い切り蹴飛ばしてしまった。

「しーっ…。」

3人が一斉に口に手を当てて、抗議をしている。あわてて謝る仕草を取ってしまったから、謝る必要がないことを思い出す。

「なんで音が聞こえているのに静かにする必要があるんですか？」

「あ、そういえばなんでだろう？こりゃ、お嬢さんに1本取られましたねえ。」

「まったく、指田少佐まで…。」

「いや、面目ありません。」

くま先輩が大きい身体を小さく見せようとして謝る。

「博士も遊んでいないで、早くして下さい。あたし達は遊んでる暇なんかないんです。」

「はいはい、ごもっともでございます。このドアの向こう側にちゃあんと回答がある訳なんです。べつに遊んでた訳じゃないんですから。」

「いえ、分かって貰えれば、それでいいんですけど…。」

今度はあたしの方が、なんか急に悪いことをしたような気がして、謝ってしまいそうになる。えーい、これではなかなか話が進まないよお。

「えーっと、どうしてMR-7星の爆発を止めることができないのかというご質問だった筈ですよ。」
あたしは首を縦に振る。

「その回答を答えてくれるのはこれです。いいです。いきますよ。1、2の3！」

博士が、バーンとドアを一気に開いた。そこには、一面に猫の群れ…。

「にゃあ、にゃお、にゃい、にゃあ、によお、にゅあ、ふにゃあ…。」

凄惨な猫の鳴き声…。反射的に耳を押える。

「なんでえ、この猫がMR-7星の爆発と関係あるんですかあ。」

「えーっ、何ておっしゃったんですかあ。」

もう駄目。怒鳴ったって何を言ってんのか聞こえない。もう、やだ…。

第四章 「マッドサイエンティスト門前の猫に教わる」

H6. 25. APR

第五章 「シュレディングーの猫」

あたしの肩に1匹の猫がかけ登って来た。小さい白い猫。その猫が他の猫に向かって、まるで何か命令する様に鳴いた。すると、この猫が何か言うのを待っていたかの様に、他の猫達、ピタリと鳴きやんでしまった。たぶん、この猫がリーダーなんだわ。

「で、この猫さん達がMR-7星の爆発とどういう関係があるんでしょう？」

ようやく博士に話しが通じたものの、なんか異様な雰囲気の流れていた。人間よりも猫の方が多い…。しかもそのたくさんの猫がみいんなあたしの方を見てるんだもん。

「シュレディングー…。」

「は…？何ですか？」

「その猫、シュレディングーに訊いてくれ。実は私は何も知らないんだ」

あたしの肩にチョココンと座っている小さい猫に怯えているようで、少しずつ後ずさりしながらぶつぶつと知らないんだという言葉を繰り返している。くま先輩を見ると、大きな肩に3匹くらい猫がよじ登っていた。

「猫さん、知ってるの？」

「にゃ？」

「MR-7星…って言っても分からないか。えーっと、空に光ってる奴があるでしょう。あんた、お星様って分かる？」

「にゃあ。」

「分かるんだ。それをMR-7星って呼んでるんだけどお、もうすぐ爆発しちゃうの。でね、あたし達はそれを防ぎたいの、分かるかなあ。」

「にゃあ、にゃあ、ふにゃお」

猫さん、あたしの言ったことが分かったのか大きく頷いてみせると、くま先輩の肩によじ登った3匹の猫さん達と相談し始めた。

「指田少佐、この猫達はあたし達の言ってることを本当に理解しているんでしょうか？」

「そうでなきゃ困りますがね。もう、ここまできたら信じるしかないでしょう。」

「猫をですか？」

「自分自身を。そして、私達がこれから見るすべての物をね。」

ミヨーはと見ると、これが完全に猫になじんでしまっていた。手近の猫を抱き抱えては頭を撫でている。

そういう考え方って、あたしも好きだな。あたしもこれから先そう考えて行動することにしよう。さすが、くま先輩だなあ…。

とにかく今はこの猫を相手にするしかない。だけど、これ以上こんなたくさんの猫に囲まれている元気もない。既に気持ちの方が耐えられなくなっている。

「とにかくあたしはここを出たい。もうこれ以上このたくさんの猫を見たくない気分。」

「だけどまだこの猫の返事を聞いてませんよ。」

「見たところ、あたしと指田少佐の肩に乗っかっている猫が、リーダー格のようですし、どうせ、この猫さん達もそのつもりであたし達の肩に乗ったんでしょうから、外へ出てもいいと思います。」

「ま、もし嫌なら降りるだろうし、そうしますか。」

あたし達が、ここを出ようと相談している間にも4匹の猫さん達は、にやあにやあと議論を戦わせていた。

「ミヨー、行くわよ。」

「はいです。」

見ると博士はとっくにいなくなっている。よっぽど、この猫さん達と会っていたくなかったみたい。ミヨーはミヨーですっかりなじんだせいで数匹の猫と名残惜しそうに、別れの挨拶をしている。4匹の猫はとりあえず話しが終わったのか、くま先輩の肩に乗っていた3匹の猫は降りてしまった。くま先輩はそれこそ肩の荷が降りてホッとした表情で大きな伸びをしている。

「おまえは、一緒に来てくれるの？」

「にやあ…。」

あたしの肩にいる白猫だけがまるで降りる気配を見せないの、そう訊いてみると、なんか肯定したようだったんで、ちょっと重いけどそのまま部屋から出てしまった。

「にや！」

「ん…？」

白猫さん…シュレディンガーって言ってたっけ、前足で右の方を指している。どうせ、この先どうしていいかなんて分からないし、シュレディンガーの言う通りの方へ行くしかない。

「サシ…。」

くま先輩を呼ぼうとして、シュレディンガーに遮られた。見ると、他の猫達がくま先輩とミヨーを部屋から出さないように取り囲んでいる。

「あたしだけに教えてくれるの？」

「にやあ…。」

「じゃあ、いいわ、行きましょ。」

別にあたし達に危害を加えるつもりはなさそうだし、よく考えたらくま先輩の身体をあたしが心配しても仕方ないじゃないか。くま先輩がちょっと本気を出したら、どっちかと言うと猫さん達の心配をしなければならなくなる。

そうしてあたしとシュレディンガーだけで庭に出てきてしまった。ソルトリバーの空気は乾燥していて、湿り気のあるキャットテイルとはまた少し感じが違う。地平線のすぐ上にキャティが半分だけ見えている。そのキャティの向こう側にあるはずのMR-7星はちょうどキャティに隠れていて見えない。でも微かな光がキャティの表面を回り込んでいて、それが空に不思議な風景を描き出していた。

「ねえ、あれ、すごい…。」

おもわず感嘆の声が口から出たけど、それ以上の言葉が出てこない。

「はあ…。」

えっ？

シュレディンガーが溜息をついたような気がしたけどお……気のせいよね？

「はあ…。」

ね、猫って溜息つくんだあ！

「まったく、人間というものは、何にでも感動するものなのだな。」

えっ、えっ、えーっ！

「シュレディンガー、おまえ…！」

「わしが人間の言葉を喋るのがそんなに不思議かね。」

「え…あっ、はい！」

「普段なら人間と話しをしようなんて莫迦げたことはやらないんだが今は時間がない。お前にはわしの知っていることを少し話さねばならぬ。」

シュレディンガーはペロッと口の回りを舐めると、あたしの肩から飛び降りた。

「先ほどのお前の質問に答えよう。MR-7星は爆発する。これは確実だ。そして防ぐことは不可能だ。爆発は必ず起こる。これも事実だ。」

「だってキャティの人達は…。」

「すべては無に返り、そして始まるのだ。事実とは人間の浅はかな智恵ごときで変えられる物ではない。これは太古より定められた決まりなのだ。」

「浅はかな智恵ですか？科学は浅はかな智恵でしかないのですか。だったら、あたし達はいったいどうしたらいいのでしょうか。それが事実なら余りにも悲し過ぎます。」

シュレディンガーが人間語を喋っているという驚きより、あたしがシュレディンガーと話している不思議さより、MR-7星の爆発を防ぐことすらできない科学力が悲しかった。

猫に…、シュレディンガーは普通の猫じゃないけど、猫に人間の科学力を浅はかな智恵と言われて、違うと声を大にして言いたいのに、それができない自分が悲しかった。

「わしは予言者ではない。MR-7星の爆発は確かに起こるが、その周辺の事象までどうこうとは言えぬのだ。ただ1つだけ言うておくが、キャティは眠りに入っている。キャティの見ている夢と、お前達の夢と、そしてわしらの夢とがすべて1つに重なった時、夢はより現実に近い希望に変わることを覚えておくがいい。」

「キャティの夢、あたし達の夢とシュレディンガー達の夢…？」

静かに地平線の下に沈むキャティの姿を眺めて、キャティの夢を考えてみる。たぶん、こういうのって考えるって言わないんだと思う。きっと、今あたしはキャティの夢を感じようとしているんだ。

「わしは、わしらの代表として、お前達の後をついて行く。ただし、普通の猫としてな。」

「シュレディンガー…。」

「わしもこの結末には興味があるのでな。特にお前達人間にだ。まったく、人間というのは面白い生き物だ。よいか、わしのこと、他言は無用だぞ。」

あたしは慌てて首を縦に振ってしまった。でもよく考えてみると、たぶん、この約束を守ることって、すごく難しい。

シュレディンガーはニヤッと笑うと、華麗な跳躍力で、再びあたしの肩に乗っかる。さっきとは違って少しも重さを感じさせない。

「にゃあ…。」

キャティは完全に沈んでしまった。けれど、ソルトリバーの空は地球のように暗くはならない。

キャティ…おまえはいったいどんな夢を見ているの…？

第五章 「シュレディンガーの猫」

H6. 25. APR

第六章 「新しい夢を捜して…」

「あたしは残ります。たとえ明日、MR-7星が爆発するとしても…」

ソルトリバーからキャットテイルへ向かう中、あたしはくま先輩とこの後どうするかを話し合っていた。キャットテイルへ戻ったら、すぐ地球へ帰るというくま先輩に対し、あたしはこのままキャティに残ると言っていた。シュレディンガーは相変わらずあたしの肩に乗っかっているけど、面白そうに見ているだけで何も言ってはくれない。

「湯浅中尉の考えていることも分かりますが、地球との連絡がつかなくなった以上いつまでもここにいる訳にはいかないでしょう。それに連邦委員長との約束は、ソルトリバーの科学者に会ってキャティの住人を助ける方法を考えろ、だった筈でしょ。一応、その約束は果たした訳なんだから、報告しに帰る必要があると思いますが。」

「それは、そうですけどお…」

「それでは私からの提案ですが、1回地球へ戻ってから柴野中尉と桂中尉とで来たらどうです。たぶん、私達が地球へ戻る頃にはキャティへの航路は閉鎖されているでしょうが、3人だったら、大丈夫でしょう？」

「はい…」

納得できないけど、反論もできない。くやしいけど、くま先輩の言う通りにするしかない。

「サシダさん、着いたです。」

ミヨーはあたし達の会話を聞いてたんだか聞いてないんだか分からないほど、何も変わらない。相変わらずシュレディンガーとじゃれてばかりいる。シュレディンガーもシュレディンガーだわ。すっかり普通の猫を決め込んでいて、本当に何も言わないつもりらしい。

あーあ。なにかも上手くいかない。やっぱり1回地球へ戻って、シバちゃん達と一緒に来なきゃ駄目なのかもね。あの子達といると不思議と物事がいい方へいい方へと進むもの。

小型艇から降りると何故かバルチェが出迎えてくれていた。珍しいこともあるもんだ。この人が外へ出るのってトラブルの時だけだって思ってたのに。まさか本当に何かあったとか…？

「バルチェ、どうしたの？」

「ついさっきまで地球の人が1人来ていたんだ。君達の帰りを待っていたんだが、1時間ほど前に帰ってしまったよ。」

地球から…？いったい誰が来てたんだろ。もしシバちゃんとMyaの2人ならバルチェは顔を知っているはずだから、ちゃんと名前と言うはずだし。ましてやあたしを待たずに帰る訳がない。

「誰だか分かりますか？」

「ミヨシとかいう名前だった。至急、君達に地球に戻るように伝えてくれと言われたよ。本当は連れて帰りたかったようだけどね。」

バルチェはちょっと口許だけで笑ってみせて…。これが彼の癖なんだけど、すぐに真顔に戻る。

「私達のことを気にしているなら、それは心配しなくていい。打つ手がない訳でもないのだ。それに、それほど我々は地球に憧れている訳でもないのだよ。」

ここらへんがひよっとすると引き際なのかもしれない。あらゆる物が、あたしに地球へ帰れと言っているような気がする。

「心使いありがとうございます。でも、地球がキャティを見捨てても、私はまだ諦めた訳じゃない

ですから。それに私にもまだ打つ手が残っていますし、また会える時を楽しみにしていますよ。」
くま先輩が丁寧に挨拶すると、右手を差し出した。バルチェの方も右手を差し出している。2人はガッチリと握手して、暫くそのままの格好見つめ合っていたけど、やがてバルチェの方から手を離すと基地の中へ戻ってしまった。

「指田少佐…。」

「たっちゃんがわざわざ来たということは、上の連中が我々の行動に気付いたんだと思う。下手をすれば委員長の立場も危ういですけど、その場合には私達も覚悟を決めなきゃならないかもしれませんね。」

「あの人って外へ出られたんですか？」

「信州に情報部が設立されたそうです。彼は科学部から異動したという話しですよ。」

あの人情報部とは…、大丈夫なんだろうか？なんかイメージが合わないような気がする。

「ところで、さっきまだ打つ手が残っているって…。」

「ああ、たぶん私の考えが間違っていなかったらの話しなんですけど、上手くいけば住人全員を1回で移動できるかもしれない。」

「どうするんですか？」

「まだここでは言えませんよ。いろいろと準備をしなければならないし、その為にも地球へ帰る必要があるんです。すべてはそれからです。」

くま先輩が珍しく恐い顔をしている。それほど状況が悪いのだろうか。滅多に笑顔を消さない人なのに…。

「みゃう…。」

うん、お前のことは忘れてないわよ。こういう状況となつてはシュレディンガーだけが、唯一の希望なのかもしれないだから…。

地球へ帰ろう。今は耐えるしかないのだから…。きっと、すべてが上手くいく時が来るはずだから…。

第六章 「新しい夢を捜して…。」

『猫が溜息つく時は…』 一天高く猫眠る星シリーズ 2ー

H6. 25. APR